

第2号

令和6（2024）4月発行

比治山学園教育研究開発センターの歩み

「比治山学園教育研究開発センター」は、令和4(2022)年度より学校法人組織に再編成され、丸2年を終えたところである。このセンターは、比治山大学・比治山大学短期大学部(以下、「本学」という。)における「教育の質保証」及び「大学全体の質保証」に関する支援組織として、既存の「比治山大学高等教育研究所」などの組織を統合して令和2(2020)年4月に設置された「比治山大学高等教育研究開発センター」から始まる。

ここでは、以降今日までの4年間について、特に本学の「教育の質保証」に焦点を当ててその歩みを紹介する。

1. 本学における教育の質保証のための組織の確立～ 高等教育研究開発センター

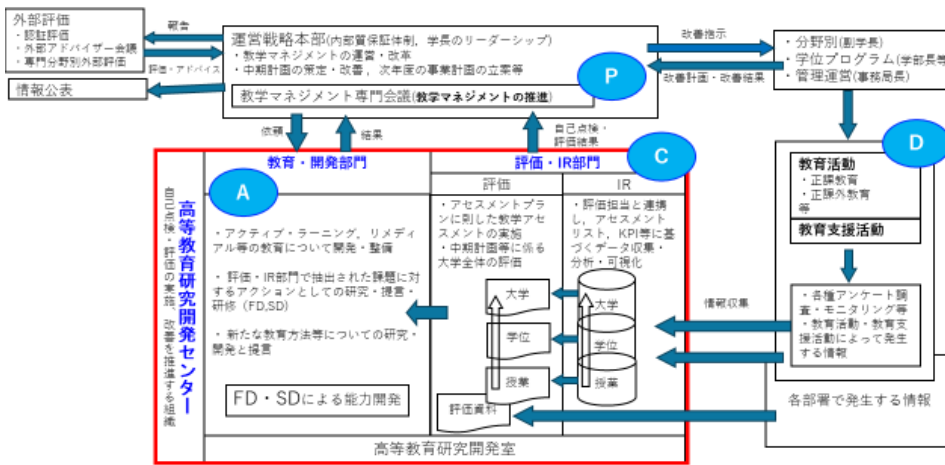
本学の教育の質保証を推進する組織は、学長を本部長とする「運営戦略本部」である。令和元(2019)年度に「運営戦略本部」のもとに「教学マネジメント専門会議」を置き、「比治山大学内部質保証方針」「比治山大学教学マネジメント基本方針」に基づいて、学長のリーダーシップのもとで三つのポリシーを起点とした教学マネジメントの恒常的な改善に取り組んできた。

その「教育の質保証」に対する主要な支援組織が「比治山大学高等教育研究開発センター」であった。このセンターは、学長をトップとする教学マネジメント体制を支援するために2つの部門(評価・IR、教育・開発)で構成され、それらの部門は、同センターを中心とした内部質保証の下図のようなPDCAサイクルの流れの中で、つぎのような機能を担う。

○ **評価・IR(インスティテューショナル・リサーチ)部門**：「C」の機能を担い、様々なデータ分析に基づいた評価を実施する。

○ **教育・開発部門**：「A」の機能を担い、評価を受けて、教育の開発・改善を行う。

そして、全体的には、「運営戦略本部」「高等教育研究開発センター(2部門)」、学部・学科等の教育活動の間で「教育の質保証」のPDCAサイクルを形成して継続的に改革・改善を進めてきた。

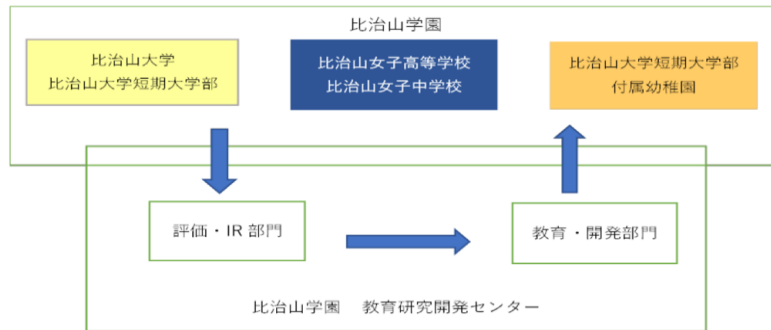


例えば、令和4(2022)年10月の教学マネジメント会議で決定された下表の「令和6年度 カリキュラムに関する基本方針」「共通教育科目・専門教育科目のカリキュラム編成の要件」のうち、このサイクルによるものは、第5・6・7項目である。

	共通教育・専門教育科目の カリキュラム編成の要件	根拠
編成 (カリキュラム)	1 デイプロマ・ポリシー達成に向けた体系的なカリキュラム編成	第二期中期計画
	2 個々の教員の教育手法を中心とするのではなく、学修者の「主体的な学び」の質を高めるカリキュラム編成	2040年に向けた高等教育のグランドデザイン
	3 「主要授業科目」の共通認識と、専任教員が担当する「必修科目」の設定、及び授業科目の精選・統合（開講科目数減）	令和3年度認証評価
	4 複数担当科目の必要性の検証、及び内容の一貫性確保のための責任者の明確化	令和3年度認証評価
	5 社会との接続を見据えて地域と連携するなど、PBLや探究学習の手法を取り入れた科目の設定	評価・IR部門による分析結果
実施 (授業担当者)	6 授業外学修時間増を目指した事前事後学修の推進	評価・IR部門による分析結果
	7 デイプロマ・ポリシー達成の視点での学生の「主体的な学び」につながる授業の実施	評価・IR部門による分析結果
	8 教育の質保証を目指した「多様なメディアを高度に利用」する授業の実施	2040年に向けた高等教育のグランドデザイン

2. 比治山学園教育研究開発センターの発足

先述のとおり、比治山大学高等教育研究開発センター(以下、「旧センター」という。))は、令和4(2022)年度から、学校法人比治山学園教育研究開発センター(以下、「本センター」という。))に再編成され、比治山学園設置校(比治山大学、比治山大学短期大学部(以下、「大学・短大」)、比治山女子高等学校、比治山女子中学校(以下、「中学・高校」)、比治山大学短期大学部附属幼稚園(以下、「附属幼稚園」))の「教育の質保証」と中長期的な計画を踏まえた「大学全体の質保証」の向上に向けた恒常的な改善・改革を支援する組織となった(下図参照)。



支援を効果的に遂行するために、旧センターに引き続き、本センターでも、2部門(評価・IR、教育・開発)を設置しており、大学・短大への支援機能を維持しつつも、比治山学園の設置校(大学・短大、中学・高校、附属幼稚園)と教育の質保証等について協働している。

発足当初は、

○ 評価・IR部門：大学・短大で実施している点検・評価についての情報共有

○ 教育・開発部門：設置校のICTに関する状況についての情報共有

から始まったが、その後の活動は下表(右)のとおりであり、今後より一層の協働活動を展開していく。

■ 令和4～5(2022～2023)年度の主な活動状況

教育研究開発センター 規程 第2条より	大学・短期大学部での主な活動	中学・高校、附属幼稚園との協働活動
教育に関する基礎的・実践的研究	・研究活動へのデータ(アンケート結果等)提供	検討中
教育及び管理運営に関する情報の収集・分析	・外部アドバイザー会議の実施 ・学生モニター意見交換会の実施 ・時系列アンケート、授業に関するアンケート、PROG調査の実施	・アンケート作成についての協議・支援(中学・高校、附属幼稚園)
内部質保証にかかわる点検評価システムの開発と実施	・教学アセスメントリストによる点検・評価(大学・学位・授業科目)の実施	・第三者評価支援(附属幼稚園)
教職員の職能開発と実施	・教職員合同研修会の実施(年2回) ・ICTによる授業改善へ向けたミニ研修会の実施	・授業研究会へアドバイザーとして大学教員派遣(中学・高校) ・遠隔授業の手法、ICTの活用について協議(中学・高校、附属幼稚園)

「教育の質保証」については、社会情勢や教育環境の変化に応じて、観点も変わりつつある。大学が「教育研究を行い、その成果を広く社会に提供する」(学校教育法第83条2項)機関であることを前提にすると、保証すべきは「教育研究の質」となる。その一翼を担う「研究の質保証」についても確認する必要がある。

また、現時点までは、本センターは、主に大学・短大の経験を活かすという形で、設置校との協働活動を進めてきたが、中学・高校、附属幼稚園のそれぞれの「教育の質保証」に対する支援については、さらに深化した議論と双方向の積極的な取り組みが必要であろう。

引用・参考文献

- ・令和3年度 大学機関別認証評価 自己点検評価書(比治山大学・比治山大学短期大学部)。
- ・比治山大学高等教育研究開発センター年報(第1号、第2号)。
- ・比治山学園教育研究開発センター年報(第1号)。
- ・中央教育審議会大学分科会(質保証システム部会)、新たな時代を見据えた質保証システムの改善・充実について(審議まとめ)、令和4年3月18日

「授業に関するアンケート」へ「4×3の比治山力」の伸長状況を追加

比治山大学・比治山大学短期大学部(以下、「本学」と呼ぶ)では、内部質保証方針に定める「アセスメントリスト」に基づいて三つのポリシーを起点とする教育の質保証を推進するために、「アセスメントプラン(教学)」を作成し、「授業科目レベル」「学位プログラムレベル」「大学全体レベル」と下位を含みながら上位へ進む手順で、それぞれの点検・評価視点に従って担当者による点検・評価を行っている。

この三つのレベルのうち、「授業科目レベル」では、授業科目の達成目標、達成(成績)水準、達成度、学修成果を点検するために、シラバス、成績評価、成績基準、学修時間・意欲・学修態度・満足度について、履修学生に対する「授業に関するアンケート」を行っている。そして、その結果に対して、授業担当者が自ら評価・コメントし、課題の改善に取り組んでいる。

現在、学生と教員との授業に関する契約書でもあり得るシラバスには、下図のようなコア・アクティブ・ラーニングのキーワードとして、受講することによって伸長するであろう「4×3の比治山力」のスキルを明記している。

コア・アクティブ・ラーニング 科目群	○
コア・アクティブ・ラーニングのキーワード	発想力、企画・計画力、傾聴・受信力、創造・表現力、プレゼンテーション力、イノベーション力

「授業に関するアンケート」は、概ね、回答者自身の意欲、授業についての評価、授業から得られる学修成果を問うているが、令和5年度から、本学の教育的特色である「4×3の比治山力」のそれぞれのスキルについて、それらの伸長状況を測定・分析するために、下図のような質問項目を追加した。

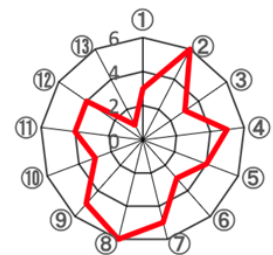
IV 4×3の比治山力について					
	1	2	3	4	5
この授業で「4×3の比治山力」のどの力が伸びましたか。(3つまで)	情報収集力	論理的思考力	課題設定力	発想力	企画・計画力
	6	7	8	9	10
	傾聴・受信力	コミュニケーション力	チームワーク力	自己省察力	創造・表現力
	11	12	13		
	プレゼンテーション力	イノベーション力	なし		

当該学期の終了前に、すべての授業で授業方法を含む「授業に関するアンケート」を行っている。集計後、下図のような授業科目ごとの集計結果やレーダーチャートで可視化された資料を授業担当者に配付する。「4×3の比治山力」については、授業担当者がシラバスに記入した身に付けさせたいスキルと受講生(学生)が自身で身に付いたと評価するスキルとの整合性や伸長状況を自己点検評価することで、授業担当者は次年度に向けて授業の工夫・改善を検討し実施することができる。

IV 4×3の比治山力について

この授業で伸びた力について選択した人数(3つまで選択)

IV-①情報収集力	3	IV-⑧チームワーク力	6
IV-②論理的思考力	6	IV-⑨自己省察力	5
IV-③課題設定力	3	IV-⑩創造・表現力	3
IV-④発想力	5	IV-⑪プレゼンテーション力	4
IV-⑤企画・計画力	4	IV-⑫イノベーション力	4
IV-⑥傾聴・受信力	3	IV-⑬なし	1
IV-⑦コミュニケーション力	5		



また、全学的な観点からは、学科別、教育分野別等でこれらのデータを分析・活用することにより、「学位プログラムレベル」での「4×3の比治山力」の点検・評価の資料となり得る。

「受験者の意向や成長意欲と汎用的能力の成長(2年間の追跡調査の結果)」

2023年度は昨年に引き続き、入試形態別による入学後学修成果の差と本学独自の汎用的能力である「4×3の比治山力」の伸長について検証を行った。

検証の対象にしたデータは、2021年4月入学者を対象として、入試志願時に実施した「志願者アンケート」、2021年4月～5月の入学時に実施した「新入生アンケート」、さらに2022年4～5月、2023年4～5月に実施した「在学生実態調査アンケート」（短大生は2023年1月に実施した「卒業予定者アンケート」）の回答結果から集計・分析された。

まず学修成果について、「総合型選抜」「学校推薦型選抜」「一般選抜」の入試形態によって修得単位数やGPAに差があるか確認したところ、「学校推薦型選抜」の学生が、その他2つの入試形態の学生よりも、修得単位数・GPAともに高いことが明らかとなった。また、修得単位数やGPAが要配慮と思われる水準の学生は、1年次末時点と2年次末時点でほぼ同じことが分かり、1年目が支援の力の入れどころであることが示唆された。

次に、汎用的能力については、まず「志願者アンケート」で「4×3の比治山力」の各能力について、「伸ばしたい能力」として選択した学生・選択しなかった学生に群分けし、後の「在学生実態調査アンケート」等で、選択した学生と選択しなかった学生でそれぞれどのように成長しているか比較した。その結果、「課題設定力」が、「志願時アンケート」で伸ばしたい能力だと選択した学生の群が、選択しなかった学生の群と比較して、経年変化によって成長していることが明らかとなった(図1)。この結果は、本学での取り組みが、この能力に関して学生の希望に沿ったものであることが示唆された。

一方で、その他の能力については、伸び悩むものなどもあり、当人が苦手を自覚/意識している分より客観的に厳しく評価するようになった可能性や、より適切な支援方法について検討していくことの必要性がうかがえた。

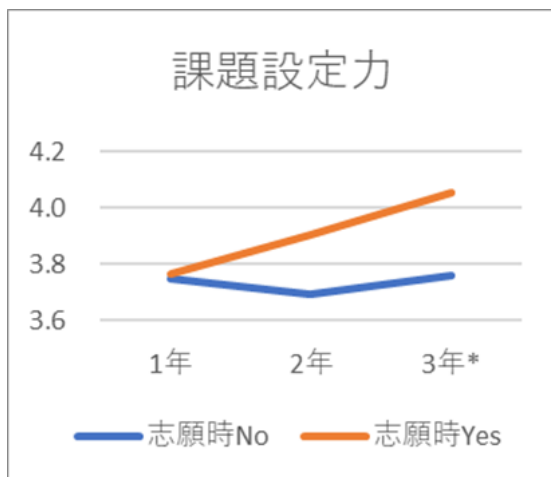


図1 入学志願時に「課題設定力」を伸ばしたいと思った学生とそうでない学生の経年変化

教育研究開発センター員 中村 孝

学生生活状況調査の結果報告

本学学生のメンタルヘルス（抑うつ症状）の状態を把握するとともに、学生のメンタルヘルスと関連するチューター（ゼミ担当）教員の教育上の関わり行動を明らかにするために、令和5年度比治山大学研究助成を受け、比治山学園教育研究開発センターと連携し、全学的な調査を実施した。本調査は2023年7月～8月と2023年11月～12月の二度にわたって行われた。一度でも調査に回答をした学生は464名であり、2時点とも回答した学生は159名であった。本調査には、質問項目の中に特定の選択肢を選ぶよう指示する項目が混ざられており、その指示通りに回答した学生（一度でも回答した学生344名、2時点とも回答した学生107名）を分析対象者とした。一度でも回答した学生の平均年齢は19.64歳（SD = 2.19）であり、調査対象であった全学科、全学年の学生から回答が得られた。統計解析の結果、本学学生の中には高い抑うつ症状を抱えた学生が存在することが明らかとなった。また、学生の抑うつ症状は担当であるチューター（ゼミ担当）教員ごとに有意な類似性が見られ、チューター（ゼミ担当）教員のあたたかく受容的な関わりが抑うつ症状の低下と関連することが示された。学生の高い抑うつ症状は休退学につながる主要なリスク要因であるとともに、その後の社会生活にも悪影響を及ぼすことが知られている。そのため、チューター（ゼミ担当）教員が担当学生に対してあたたかく受容的に関わることで、学生の健康的な学生生活を促すとともに、大学としてメンタルヘルスの不調を抱える学生への組織的な支援体制を構築していく必要があるだろう。

現代文化学部社会臨床心理学科 講師（執筆当時） 吉良 悠吾

ICT集中ミニ研修会

授業におけるPC活用の促進に向けて

大学・短期大学部では令和5年度入学生から全学生パソコン必携化を開始し、授業等におけるPCの活用を促進しています。情報メディアセンター運営会議、数理・データサイエンス・AI教育プログラム部会、教育情報部会において授業内でPCを活用する意義の検討や課題を整理し、教育研究開発センターとの連携によりFD研修の一環として、教員に授業におけるPCの活用事例やツールの利用方法を紹介する研修会を企画・実施しました。ICTを活用した授業改善に向けた取組です。

実施期間：令和5年11月22日（水）～12月20日（水）

各回：16：30～17：00

会場：3号館2階 ラーニングルーム（RED）

主催：教育研究開発センター

実施期間：令和6年2月26日（月）～3月1日（金）

各回：15：30～16：00

会場：3号館2階 ラーニングルーム（RED）

主催：教育研究開発センター

	実施日	内容	参加者数
第1回	11月22日（水）	ふきだしくん シンプルな操作・機能で意見の交換	14名
第2回	11月28日（火）		11名
第3回	11月29日（水）	Padlet オンライン掲示板で意見交換・意見交流	11名
第4回	12月5日（火）		5名
第5回	12月6日（水）	FigJam 多彩な機能でチームコラボレーション	12名
第6回	12月8日（金）		6名
第7回	12月13日（水）	Kahoot! クイズを授業に取り入れて知識定着・理解度確認	7名
第8回	12月20日（水）		7名

	実施日	内容	参加者数
第9回	2月26日（月）	GoogleClassroom 音声入力を活用した課題返却の効率化	16名
第10回	2月27日（火）	Classroomscreen アプリを集合させて授業を効率化	12名
第11回	2月28日（水）	Mentimeter 学生の反応を集計・可視化	9名
第12回	2月29日（木）	Canva フォーマットを編集してデザイン性の高いグラフィック作成	9名
第13回	3月1日（金）	Excel 基本的な関数の使い方と業務改善事例紹介	個別対応

<参加者の感想>

- ▶ 登録の必要のないアプリは設定する必要もなく、説明もほとんどいらないので、色々な場面で役に立つと思いました！（ふきだしくん）
- ▶ グループディスカッションを行った後の各自の意見を共有・可視化するツールを探していたので、早速来週の授業から使用したいと思います。（Padlet）
- ▶ ふきだしくんよりも活用の幅が広いツールだと思います。一方で機能が多いと学生をコントロールするのが難しくなるので、ゼミ等で使用するのが適当だと思います。（FigJam）
- ▶ 学生の作業が盛り上がりながら出来そうと思いました。（FigJam）
- ▶ 使ってみたくて思いました。学生に問題を作らせてもいいなと思いました。（kahoot!）
- ▶ 学生の記憶定着におおいに活用できそうです。（kahoot!）
- ▶ 音声入力を活用する便利さに気付かされました。（Classroom）
- ▶ 授業でも、自身のWorkマネジメント用にも使えそうだなと思いました^^（Classroomscreen）
- ▶ 授業の中で、その場で学生の意見を表示させるのに使用できそうだと思います。すぐに実践できそうです。（Mentimeter）
- ▶ Canvaを一度ログインしたことはあったのですが、ちゃんと作成したことはなかったので、勉強になりました。いろいろデザインのプレートがあり、便利ですね。（Canva）
- ▶ 30分という短時間で要点を得ることができ、ありがとうございます。
- ▶ 隙間時間くらいの短い時間で、さまざまなツールに関して知ることが出来るのがとてもありがたいと感じました。



*令和5年度 教育研究開発センターの主な活動

- 4月 新入生アンケート調査（大短）
在学生実態調査アンケート（大短）
- 6月 附属幼稚園学校関係者評価委員会【学校関係者評価】
- 7月 前期授業に関するアンケート（大短）
第1回学生モニター意見交換会（大短）
- 8月 第1回教職員合同研修会（大短）
- 10月 卒業生アンケート（大短）
就職先企業アンケート（大短）
- 11月 ICT集中ミニ研修会（全8回）（大短）
- 12月 第2回学生モニター意見交換会（大短）
附属幼稚園学校関係者評価委員会【学校関係者評価】
附属幼稚園第三者委員会【第三者評価（資料評価）】
- 1月 後期授業に関するアンケート（大短）
卒業予定者アンケート（大短）
- 2月 第2回教職員合同研修会（大短）
ICT集中ミニ研修会（全5回）（大短）
- 3月 附属幼稚園学校関係者評価委員会【学校関係者評価】
中高関係者との連絡会議

当センターの略語 CHIE (Center for the study of Hijiya Institutional Research and Educational Development)は日本語の“知恵”とかけて、シンクタンクとしての機能を表現した。

比治山学園 教育研究開発センター

CHIE Center for the Study of Hijiya Institutional Research and Educational Development

〒732-8509 広島市東区牛田新町4丁目1-1 TEL : 082-229-0122(代) FAX : 082-229-5100
E-mail:koutouk@hijiya-u.ac.jp